

編者はしがき

谷口雅春先生の代表的聖典は「生命の實相」であるが、代表的経典は「甘露の法雨」である。その講義の書が本シリーズ第35巻と次巻36巻である。本シリーズの新編「生命の實相」では、愛蔵版「生命の實相」第十一巻「經典篇」二「甘露の法雨」講義」と、同じく愛蔵版第十二巻「經典篇」聖經「天使の言葉」講義」を合わせて「經典篇」とし、それを上下二巻に分けて収録した。

「甘露の法雨」は、その説明が必要なくらい有名な經典であるが、谷口雅春先生は本書の「はしがき」で次のように述べておられる。

「『甘露の法雨』はいわゆるインスピレーションによって突然浮かんできた思想が一種詩的なリズムを帯びてきたのを書き止めて置いたものである。後より見るとこの聖經は期せずして、『生命の實相』全巻の真理を縮約して歌ったものになっている。それを説誦することによっていろいろな奇跡を演じたので、ついに聖經と称せられることになったのである」(本書「はしがき」)

「この聖經はたんに現実界の人間が説誦して悟りを聞いて、痛苦惱苦を去るばかりでなく、靈界の諸靈もその説誦の声を聞いて悟りをひらき、迷える障りの靈も守護の靈となることが後に明らかとなったので、神仏礼拝の際その祭壇に対して説誦すべき生長の家の聖經となったのである」(本書「はしがき」)

「しかし読んで意味の分からないようでは功德が薄いので、かつて毎日曜日に東京小石川護国寺の月光殿においてその大要を講義したものを次に掲げることにした。主として講義の速記によったのでわたしの文章だというよりも、わたしの語調が写されているところに特徴があるであろう」(本書「はしがき」)

この「甘露の法雨」は、「生命の實相」「聖詩篇」にも収録されているように、もともとは他の自由詩と同じく、真理を歌う五〇五行に及ぶ長詩として発表されたものである。「生長の家」誌創刊九ヵ月後の昭和五年の十二月発行の「生長の家」誌に「生長の家の歌」として発表され、「神」「霊」「物質」の三つの項目が収録された。続いて、昭和六年二月発行の同誌に「甘露の法雨」と改題されて、「實在」「智慧」「無明」「罪」「人間」が発表され、続いて昭和七年に、同じく「生長の家」誌に「甘露の法雨」と題されて「生長の家」の項目が発表された。この「生長の家」の項目が、後日、「天使の言葉」と題されて独立した。

この「甘露の法雨」は、発表後ただちに奇蹟が生じ、病氣その他の人人生上の苦悶が消えていく体験が続出する。その中であって、昭和十年に、京都の小木虎次郎（おきとらじろう）工学博士がこれを経本型にして生長の家京都教化部より出版し、今日まで多大の福音を多くの人々にもたらしてきた。

この「甘露の法雨」は、それを読むだけで、あるいはそれを聞くだけで奇蹟が生ずることは、これまでの数々の体験によって既に実証済みであるが、しかし、谷口雅春先生は「読んで意味の分からないようでは功德が薄い」とおっしゃるのである。そうであるならば、意味を知ってこの「甘露の法雨」を読んだとき、いかなる功德が我々にもたらされるのであろう。空恐ろしいほどの「神の救いの靈波」がこの経本には秘められているのであろう。その理解の助けとして、谷口雅春先生はその講義を、東京の護国寺月光殿で連続的に行った。その記録が本巻及び次巻である。

本巻には「神」「霊」「物質」「實在」「智慧」「無明」「罪」の七項目についての講義が収録されている。

谷口雅春先生は、「この聖經は期せずして、「生命の實相」全巻の真理を縮約して歌ったものになっている」と述べられているが、この意味するところは、単に言葉が少ないのが「甘露の法雨」、多くの言葉で語られているのが「生命の實相」という外見上のことだけではない。

たとえば、「甘露の法雨」の冒頭「神」の項目は、「生命の實相」の本論「実相篇」

第一章「近代科学の空即是色的展開」(新編「生命の實相」では第二卷「実相篇」第一章)と合わせ鏡のような形をなしている。

一見すると、「甘露の法雨」の「神」の項は「神」を説き、「生命の實相」の第一章は「物質」を説いているので正反對のことに思われ勝ちだが、決してそうではない。「甘露の法雨」で説かれる「神」は「物質無」と共に歌われており、「生命の實相」の「物質無」は「神独在」を前提に説かれているからである。それは正反對の方向からそれぞれ出發して、「物質無、実相独在」という同じ真理の到達点に行き着くのである。そのことを谷口雅春先生は、本書で次のように述べておられる。

「この「物質はない」という生長の家の発見したる尺度によつて、キリスト教を解いて行き、仏教を解いて行くという時に初めて、この神なるものと仏なるものが一つであるということがわかるのであります。「神がこの世を造り固め給うた」として、「この世」という言葉を「物質世界」と見る限りに於て、それは迷いである。けれどもその「この世」という言葉を物質世界の奥にある金剛常樂の「実相の世」という意味に於て使う限りに於ては、その創造主は創造神であると同時に、一如の仏であり如来である。その完全円満なることを形容してこの聖經には「無限、宇宙を貫く心、宇宙を貫く生命、宇宙を貫く法則、真理、光明、智慧、絶対の愛。これらは大生命——絶対の神の真性にして」とこう書いてあるのです。こういう無量寿、無量光、絶対一如の真理であつて三世(現象世界)を超越し、物質世界を超越せる妙々なる大生命、これが仏教に於ける仏でなくて何でありましょう」(一九二〇頁)

この「甘露の法雨」講義で、そこに説かれた真理が如何に偉大な真理であるかを理解し、実生活がより輝かしきものとなることを念願してやまない。

平成三十一年三月吉日

谷口雅春著作編纂委員会